

同志社時代の友人

原 誠	同志社大学神学部教授 日本キリスト教団正教師
講師紹介【はら・まこと】	【研究テーマ】 日本とアジアのプロテスタント・キリスト教会の歴史

私の同志社体験

最初にごくフランクに自己紹介をしたいと思います。私は同志社大学神学部の卒業生の一人でありませけれども、在学したのはほんのわずか四年間です。学部の三年編入で入ってきまして卒業後三年たって大学院の博士課程に二年間おりましたので、在学したのはほんの四年間です。どうして同志社に来ることになったのかというのも時代の業です。私の父は、実は関西学院大学神学部を卒業した牧師です。普通同志社大学神学部を卒業し、牧師になると、同志社から同志社にというのが多いのですが、いろんなことがあって同志社大学の神学部が私を受け入れてくれました。それはお年を召した方々ならおわかりかも知れませんが、私の年齢は一九四八年（昭和二十三年）生まれ、いわゆる団塊の世代でポチポチ引退といわれるようなことがいわれている世代です。私たちの学生時代というのは、全国で大学闘争が吹き荒れた時代です。ですから私は高校を卒業して、東京大学ではないのですが東京の私立大学、キリスト教の大学にいたのですが、学生運動にはまってしましまして、三年生で中退しました。一年間東京におりまして、土方をやったりトラックの運転をやったりした生活が一年間続きました。父が牧師のもので「こんなキリスト教は何だ。こんな父親はなんだ」というような反発の思いがあって、そのキリスト教をきちんと勉強して、キリスト教に決着をつけて、キリスト教のないところで、宗教と関係のないところで生きていきたいと思い、そういう自分を受け入れてくれるのが同志社大学神学部でした。ですからご存知の方がおられるかもしれませんが、関西学院大学の神学部や東京神学大学というわれわれの専門の大学があるのですが、そういう不埒な思いを持っておりまして、入れてやらないという門前払いが普通なのです。しかし同志社はそういう私を受け入れてくれました。しかしお金がなかったのでアルバイトの日々ですっかり授業には出ない。しかし卒業させてくれました。そして学部を卒業して、すぐアルバイトで行っていた京都の呉服屋さんに就職して、反物を巻くというサラリーマンの生活に入って、いろんなことがあって三年経って、大学院に入り直し、そして、大学院の時はまじめに勉強しまして、牧師になったわけです。

というわけで合算しますと私の同志社体験というのはほんの四年間で、他の先生方と比べるとずいぶん違うわけです。そういう状況の中で、私の学生時代、同志社時代に出会った友人の何人かを紹介したい、同志社の同志社らしさがそこにあった、そのことを紹介したいと思っています。同志社スピリット・ウィークを見ておると、私も実は専門が日本のキリスト教の歴史ですし、別の授業で今日も新島襄について、あるいは同志社の歴史について授業で教えていますので、ある程度のことは新島襄はこういう人物だ、同志社はこういう学校だ、ということをお話することは私でもできるのですが、それよりは新島がどうい人物であったか、同志社がどうい教育理念を持っていたか、それはそれとして、同志社の中にそういうスピリットがどういふうに生きているか、生きていたかという体験を、今日はご紹介したいと思ったわけです。

自分のコンテキストの中でいかに生きるべきか

最初に二人の人物をご紹介したいと思います。一人は鈴木正穂という人物で、もう一人は中川六平、ニックネームがロツパイ、本名は中川文男という人物です。どうい人物かということについて話す前に、少し時代背景についてお話をしなければなりません。今の大学の一年生二年生の時代、つまり自分たちが今大学で勉強している時代というのは、二一世紀間もなくで、いろんな事件が起こって、宗教の対立やいろんなことがいわれているそういう時代の中で、学生生活を送り始めているわけですね。私が申しあげたいのは、神学部での勉強の方法なのですが、テキストとコンテキストということ。テキストというのは、非常に平べったくいえば、真理とか、キリスト教の場合に言えば聖書ですね。仏教徒の場合だったら、お経であるかも知れませんが、イスラムであればコーラン、つまり自分の人生の根拠になるようなテキスト、それは二千年来あるいは五千年来続いているのかもわかりませんが、生きている私にどういふうに関わるのか、私は私の時代背景の中で、人生の中で、コンテキストの中で、テキストが関わる、ということですね。つまり真理はひとつではなくして、その真理はテキストとコンテキストのこの状況の中で、たとえば若くて体力があって、未来が非常に豊かで可能性として感じられる年代において、聖書の言葉を聞くということがあるでしょうし、人生に行き詰まるとか、仕事に失敗してとか、あるいは体力が落ちるとか、いろんな事柄の中で私たちは生きていて、その自分のコンテキストの中にテキストがどう関わるか、さまざまな対応性があるわけです。ですから当面、スピリット・ウィークでいいますと、新入生の中では、今の自分の置かれた状況を考えますと、偏差値の高い大学をクリアして入ってきて、同志社ってどうい大学なのかというのは、彼らのコンテキストの中で、いかに生きるべきかというテキストとからむということでしょうし、それを私の場合で言うと、先ほど少し述べた団塊の世代のこの大学が、バリケードされて、またする方であったり、機動隊とぶつかったりとか、そういう世代として生きていた時の生き方のものがきの中で、知り合った友人の二人が、今言った鈴木マサホと中川ロツパイという男なのです。

ベトナム戦争というコンテキストの中で

その私の時代というのは、ある程度の年齢の方はおわかりだと思いますが、ベトナム戦争が激しかった時代です。七〇年安保条約の改定とか、大阪万国博覧会が開かれていた時代ですね。ベトナム戦争が激しかった時代です。鈴木マサホと中川ロツパイと私の共通しているものは、同志社大学の学生証を持っていながら、京都に居なかった。ではどこに住んでいたのか。山口県の岩国なのです。なぜ岩国なのか。岩国にはアメリカ軍の海兵隊の基地があります。海兵隊の戦闘爆撃機が、沖縄で給油をして、また飛び上がって行って、ベトナムに爆弾を降らして、また戻ってくるというそういう状況があったのです。沖縄なんかはもっと近かったわけですが。今はイラン・イラク戦争があってアメリカの兵隊が、自分の国の戦争に正義を見出し得なくなって、サボタージュをし始めるようなことが起こっていますね。同じようにあのベトナム戦争の末期にも、基地の中でアメリカの兵隊がサボタージュを始めました。こんなところでこんなために死ぬのは嫌だとか、こんなことのためにベトナム人に爆弾を降らせるのは嫌だというふうになって、戦争に協力することを拒否する米兵が出てきました。また米軍の基地の中でも、今はちょっと違うかも知れませんが、同じ白人と黒人の暴力事件が起こった時に、必ず黒人が悪いといわれる人種差別みたいなものが基地の中でもあったわけです。そういうことで「ベトナムに平和を市民連合」、通称「ベ平連」と言ったのですが、そういう市民運動がたくさんあちこちに生まれてきました。多くは青年が参加したのです。そして岩国の運動をやっていた連中が、支援をしてほしいと呼びかけました。その結果、福岡から広島から東京からそして京都から、何人もの人たちが岩国に出かけて行ったのです。そして米軍の基地のすぐそばに一軒家があってそれを借りてみんなで改造しました。喫茶店に改造したわけです。改造をした何人もの人が、長い付き合いがあるわけではないのですが、岡林信康がそうです。それから京都精華大学の学長になったのもその仲間の一人です。昔大工をやっていたのです。中川ロツパイ、鈴木マサホも岩国へ行って住んでいたわけです。みんなやる店ができた。私は学生時代大学へ行かなかったと言いましたが、お金がなかったので喫茶店でアルバイトをしていました。大学へ行かなくても喫茶店で仕事をしていたのです。ですから成績が良いわけがない。試験の時にちょっと行ってレポートを書いて単位をもらっていたくらいですから、ろくすっぽも勉強するはずがないのです。できなかった。でもとにかく喫茶店の技術だけは覚えたのです。「店は作った。中でコーヒーを作るやつがらん。原を呼べ」と言われて、私は岩国へ移ったわけです。ですから基地のすぐそばの喫茶店で出会い、店長になったのが中川ロツパイ、そのウェイトナーをやっていたのが鈴木マサホという男で、中のキッチンで仕事をしていてのが私であったのです。喫茶店は喫茶店なのですが、別のところにスペースがあり、マガジンラックがあって、反戦運動の機関紙であるとか情報誌が並んでいて、米兵がそこに来て、いろんな情報交換をして、ディスカッションをして、というようなそういう場であったのです。「ほびつ」という名前であった、その喫茶店には近くの町のおばさんたちが出かけてくる。また、登校拒否になっている中学生や高校生がいっぱいそこに来るのです。そういう連中が行き場がなくて、昼頃から夕方まで学校に行く格好で出かけてきて、喫茶店でカバンを開けて弁当を食べて、というような一種の逃げ場と言いましようか、一種の解放される場みたいな感じで、喫茶店が運営されていて、夜は十一時頃まで米兵がいてというようなそういう店でも働いていたのです。その店で働いていたのが、みんな同志社の学生というわけです。一人は文学部の教育学でしたし、もう一人は哲学、私は神学部でした。学部学科を超えて時代の状況の中で、そういうことを学生であっても大切だと思う学生たちが、その時代の状況の中で、それに答えて、そこに身を置いて、というような学生が私の友人にいました。

友人たちのその後

よくまあ卒業させてもらったものだ、もちろん平均点がいいわけではないのですが、とりわけその鈴木マサホという人物は、大学最長不到距離で八年間、正確に言うと九年間大学にいました。一年間休学をはさんでいるので、合計して学生時代が九年間続いたのです。その男は、京都で学生青年たちの中の「ベ平連」運動の中核的なリーダーの一人でした。一年間休学して、何をしていたかという、キューバに行ったのです。キューバのサトウキビ畑で一年間働かせてもらっていた。そういう経験を持っている男です。彼は吉田神社の氏子総代の十四代目か十五代目かというそういう家で、吉田神社のすぐそばなのです。先ほど言いましたように私の父は牧師で、私は日本の社会の中ではどうでもいいことですが、六代目のクリスチャンです。日本の中ではそんなに多くない希なケースなのです。そんな話をしているうちに、鈴木マサホとそういう話になりまして「おい十四代目」とか「おい六代目」とか喫茶店の中で冗談をいながら一緒に生活をいたしました。そういう男がその後市民派と銘打って、市議会議員選挙に出て、何度も落ちて、そして最終的には、どうしても市議会議員になって京都の政治にかかわりたいということで、当時の社会党に入って社会党の票を分けてもらって、今は民主党にいますが、左京区選出の市議会議員になっております。十年くらい前でしょうか、総合政策科学研究科が大学院にできました。その時に、彼は市議会議員の身分であって、総政で勉強して京都の行政についての研究を論文にまとめ修士号をとって、今も市議会議員をやっております。そういう鈴木マサホがいます。

それから中川ロツパイは新潟県の出身ですが、確か六年かかってやっと卒業しました。ジャーナリストになることを目指して、そしてしばらく週刊ポストが週刊現代かのルポライタールになって、文筆業でジャーナリストとして実績を積んで、ある段階で新聞社に入って、うろろしながらエディターとして自立しています。

「てき儼不羈（てきとうふき）」なる人物

今の私たちの一般的な大学のイメージの中で、偏差値の高い大学、別にこれを言っていることが悪いというつもりではありませんが、司法試験の合格者トップランキング10に入るとか、会計士の合格者が何十人いるとか、また今の時代でいうと、ロースクールやビジネススクールで、トップエリートが生まれてくるという、それが悪いことだということはずいぶん思いませんが、そういうところが同志社の「売り」ではないということを私は確信しているのです。それは私たちの時代のコンテキスト中で、テキストを求めて、学生として、うごめき、うめき、苦悶しながら身を置いて、いろんなことをやった、そういう時代の中に同志社の創立者の新島襄の遺言であった、皆さん聞いたことありますか、「てき儼不羈（てきとうふき）」というのはそういう人物のことを言っているのだと私は思うのであります。ただ野性的で粗野で乱暴な口をきく暴れ馬というようなことを「てき儼不羈」というのではなくて、ちまちまと平均点を高くして単位をうまくそろえて、「高い点数を取ること」、それがもちろん悪いわけではありませんが、そのもっと根本にある内側からにじみ出てくるような「どう生きるのか」という問いについて、真剣に向き合って、生きていくというようなそういうことこそが、大きかったり小さかったり、どの方向だったかとかは、時代と状況が違うでしょうから、同一に論じることができないとは思いますが、そういう鈴木マサホだとか中川ロッセイという友人たちは「てき儼不羈」なる人物であったと思うのです。多分彼らは「てき儼不羈」という言葉は知らなかったかもしれませんが。私も実は「てき儼不羈」という言葉を知ったのは後になってからです。大学時代は、新島襄の墓にも行ったことはありませんし、私は神学部というサイズの小さい学部ですから、新島先生の校祖墓参というのがあったにもかかわらず、「なんやそんなん」という反発の方がある、「のこのこと先生の後をついて墓参りに行くなんて」という反発の方が強かった。言ってみれば食わず嫌いですね。しかし卒業してしばらくたって、いろんな現場の中で生きていく中で、「新島ってという人の思想は？」「根拠となるキリスト教の理解は？」と問うことがしばしば起こってくるわけです。私は牧師ですから、そういう中で改めてきちんと新島と向き合って、そして「てき儼不羈」という言葉もそこで知るようになった。今振り返って考えてみて、その鈴木マサホや中川ロッセイなどは「てき儼不羈」という言葉は知らなかったけれども、それを学生生活の中で十分にやった男たちだということを使うと同時に、そういうのを許容していたと言いますが、単位を取得することができて、「お前は退学だ」と言わない同志社らしさというのを、私は同じような所において、実体験をしたわけです。

同志社の同志社らしさ

コンテキストで言うのであれば、ボランティア活動であるかもしれませんし、エコロジーのいろんな運動であるかもしれませんし、人によって興味と関心、専門性が問われるでしょうから、「これが」というものは特段ないと思いますが、その中で自分の生き方にもがきながら探っていくというそういうところに同志社らしさがあると思うのです。ちょっと残念だなと思うことは、新聞の京都欄を読んでいますと、時々立命館がいろいろな形で報道されています。そういう意味では、見た目にジャーナリズムでは、立命館が何かやっているように見えるのですが、しかし同志社には本来自主自立の自由な活力があったはずだと、こういう言い方を始めたら、若者から年寄りと言う「今の若い者は・・・」というふうになってしまうのかもしれませんが、やはり同志社は自主自立の精神である同志社らしさがそこにあるのだと思いつつ期待をしたいと思います。

私は、過去二十年にわたり、毎年学生を連れて、タイへ行くスタディ・ツアーのプログラムを続けてきています。タイのずっと北側のビルマやラオスに近い山の中には、少数山岳民族が約百万人ほど生活していて、そういう人々を訪ねて交流をするということをずっと続けてきています。興味と関心があるようでしたら、また後からお話いたしますが、と同時にタイだけではなく、沖縄や韓国にも学生を連れて行きます。

この前、学部のゼミ旅行で沖縄へ行きました時に、一人の神学研究科の大学院生と沖縄で会いました。その学生は、卒業式間近なのですが、修士論文も書いていませんでした。しかしそこにいたわけです。私のゼミではないので直接指導することはなかったのですが、その学生がその神学研究科にいることは知っておりました。長い間顔を見たことがなかったのですね、どうしているのかなあと思っていたら、沖縄でばったり会ったのです。彼は何をしているのかと言うと、普天間という飛行場に去年夏ヘリコプターが落ちた事件が起きましたね。それ以前からずっと問題になっていたのですが、その普天間の飛行場を海上に移そうという計画が続いていまして、その海上ヘリポートに予定されているところで反対運動が続いているのです。私はそこに何度も行ってあります。この一年間ずっとテントを張って監視をして、ボーリングのために調査船が出てくるという、カヌーで出て行って妨害するため、ウェット・スーツを用意するという（若い人ばかりではないのですが）若い人たちがいるわけです。彼がそこにいるのです。大学にいないのです。修士論文もついに書けなかったのです。彼は明日卒業式だということで、明日帰ると言っておりましたが、そういうところで沖縄にへばりついて学生生活を送っている学生がいるのです。もちろん一方で「お前、修論どうした？」という部分があるわけですが、片一方同志社らしいなという部分と、私の心は二つに割れるわけです。しかし私が学生時代そういうことをさせてもらったゆえに、半分心配しながら、半分ようやくやってきているなという思いが両方ある。これが同志社らしいと私は思っているのです。いろんなことがあります、同志社らしさ、あるいは新島襄のリベラルアーツの考え方というのは、多分この同志社スピリット・ウィークで、いろんな先生方がいろんな形でお話しされたいと思いますが、私も話せば話せるのですが、もっと違う形で、実感の部分でそういう人間関係があったことを、私自身も励みになっていますし、そういう私たちを「そのままいいよ」といつてくれた同志社に私は非常に感謝しているわけでありませぬ。

二〇〇五年四月十五日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録